学部図書館で古医書・雑誌が充実し管理も行き届いているところの一として金沢大学医学部があげられる。ここには学外顧問ともいうべき寺畑喜朔先生が関与しておられ、個人的依頼にも迅速、丁寧に応じて下さり、小生はその恩恵に浴している。ただこれはいわば特別のケースであって、いつまでもそれに甘んじているわけにもいかず、将来的にはやはり組織として、マニュアルによって動く態勢になることが望ましいであろう。

出身大学の学長をつとめられたこともある一医史学者が亡くなられ、遺族は出身大学に全蔵書の母学寄贈を申し出られたが、大学側は困惑の姿勢を示したと聞いた。大学側としては自分の欲しいもののみをつまみ食いできるのであれば鬼に角ということであろうが、これも難しい問題である。実際、他の大学図書館でも○○名誉教授寄贈とされたダンボールがほこりをかぶって山積みされているのをみたことがある。

個人がそれなりのポリシーを持って蒐集した医史料のコレクションが、その死亡とともに古書店に売り払われたり、ひどいときは廃棄されたりすることは惜しまれる。専門家や古書店などの第三者機関によって、古書店の買入れ価格よりやや低目の価格査定をした上、コレクションを一括して、適当な機関などに購入していただければ、遺族にもそれなりの収入が入って喜ばれると思う。これは当人の希望により生前にそれが行われても良いだろう。むろん価格査定をしてくれた人には、応分の報酬を払う。しかしあくまで商売ぬきのボランティア性格の強いものだけに査定者を得ることが困難かもしれない。

今は不景気であり、とくに国公立機関は不定額のワクを予算にとっておくことは難しいと聞く。しかし一点、何億円もの絵画などを気軽に購入したりもする。要はその意気と努力であろう。

〝日本における医史料の蒐集と保存〟の現状は寒心に堪えないともいえるが、上記したように、アクティブな動きを示す個人・組織も少ないながら存在し、幾多の天災や戦災を受けたわが国がなお世界的にも恥ずかしくない医史料を保存・活用していることは驚異であり、悲観するにはあたらないと思う。希望を持ちたい。

23　長与健夫

江戸中期『解体新書』の発刊以前に既に当時の欧州の医

学、医療知識がたとえ一部の者にではあったにせよわが国に伝えられ、長崎を訪れた讃岐の医師、合田求吾、大介兄弟が蘭訳士吉雄耕牛、芦風兄弟からオランダ商館を通して得た蘭書を聴きとり、それを記録として残していることを二回に亘って貴誌に掲載した。

縁あって合田大介のご子孫、合田慶助氏と知己を得、数回同氏と交信している間に、慶助氏は同家に所蔵されているご先祖の書類をすべて整理された上リストを作られ、その中には吉雄兄弟と合田兄弟との間に交された書簡もありその入手を希望したところ、それも含めて頂戴した。しかし流暢な古文は私には読めないので知友、西宮秀紀氏（愛知県立大文学部）に解読をお願いしたところ、西宮氏は大学時代の後輩遠山佳治氏（名古屋女子短大）にそれを依頼され、現代文化された四通をご送りいただき、現在わが家に保存している。

内容には私信に亘ることも書かれているが、医学史にとって貴重な資料かと思います。合田慶助氏その他の方々のご諒解が得られれば、現代文を含めた四通を提出したいと考えておりますが如何なものでありましょうか。

関係者の住所所属は左記の通りです。

合田慶助　〒763-0000　丸亀市風袋町一三一

西宮秀紀　〒464-0083　名古屋市千種区北千種二-一-四三
萱場住宅一-二〇一
（愛知県立大学文学部教授）

遠山佳治　〒444-0840　岡崎市戸崎町上り場西三-四
（名古屋女子短期大学）

24　濱中淑彦

我国における医史資料の蒐集・保存の現状は、欧米に比べると月と鼈と皮肉らざるを得ないほど貧困な医史学教育とともに、誠にお寒い状況にあることについてはあらためて贅言を要しないであろう。周知の通り、欧米では大学に医学史講座が設けられているのが原則（科学史、Medical Humanitiesの一部門の場合もあり、最近では医学倫理も担当）であり、多くの場合に医学博物館を併設して医学教育、市民啓蒙にも寄与していることは訪欧の機会によく見かけることである。手元の資料によればEuropean Association of Museums of the History of Medical Sciences（一九八九年の時点で名誉会長はリヨンのDr. Ch. Mérieux、会長はWellcome InstituteのDr. B. Bracegirdle）という連合組織す